

翼と羽根

千瞑

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたら地下街だった。

名家のヒロインが進撃の世界にトリップする話。

3 2 1

目

次

5 3 1

ばしゃん……

水溜まりが跳ねる音と共に急に気配が後ろに現れた。

振り返ると何かの塊が水溜まりに落ちていた。

近づくと薄暗い路地でもわかるほど白い肌、艶やかな長い黒髪をした東洋人らしき女だつた。

規則的に上下する身体は生きている証拠だつた。

気を失つて目を閉じてるので瞳の色まではわからないが、瞳の色がどうであれ、ここ地下街では五体満足の生きている東洋人にお目にかかることはまずない。

大抵は貴族の豚共がコレクションにしたり、もし生き残りがいるとしても殺されて身体をバラバラに切り刻まれて売られる。

地下街で出回っているのは髪や目玉、指くらいだが、眉唾ものが多くの本物かどうか怪しい。

運良く生き残つても奴隸になつてしたり、娼館で客をとらされたりしている。

目の前に倒れている東洋人は女だ。

東洋人の女は高値で取引される。

運良く命を取られなつたとしても身体の一部を売られたり、その見

目麗しさのため娼館で客を引かされたりするだろう。

酔っぱらいの男たちの声が近くで聞こえている。

女をここに放置したままにするはどうしても気が引けたリヴィアイはその女を抱き上げると帰路についた。

* * *

「天使つて本当にいるんだなー」

生きた東洋人を間近で見たことがないイザベルは瞳を輝かせてベッドの上で眠つている女を見つめている。

「しかし、何でまたこんな所に東洋人がいるんだ。オレはもう絶滅したかと思つてたけどな」

「さあな。こいつの服装からして貴族の豚野郎の手から逃げてきたと考えるのが妥当だな」

女が身に付けている服は上質なものばかり。ただの奴隸が身に付けられるものではない。傷ひとつない透き通つた白い肌につやのある黒髪は相当な金をかけているにちがいない。

「それに……」

リヴィアイがテーブルの上にコトリと置いたのは葡萄の薦模様があしらわれた銀色の食用ナイフ。

「……こんな代物は金持ちの家にしかない」

ファーランはテーブルの上に置かれた銀のナイフを手にとつて確かめる。

紛い物じやない。本物の銀食器だ。

「これだけで相当な金になりそうだな。この子はどうする？」
「さあな」

リヴィアイは女の寝ているベッドに近寄り、女をこれでもかと眺めているイザベルを遠ざけると、眠っている女の上のシーツを乱暴に剥ぎ取つて怒鳴りつけた。

「おい、起きろ！ いつまで寝てやがる」

その言葉にピクリと反応した女はパチリと瞼を上げて飛び起きた。瞳の色は黒。吸いこまれそうな漆黒に全部持つてかれそうになる。女は純粹な東洋人だつた。

突然低い声が頭の中に轟いて私は飛び起きた。

目の前には三百眼の見知らぬ男がいた。

私を睨んで見下ろしている。

男は白のワイシャツに茶色のズボン姿で歳は自分より少し年上く
らいか。

家の者ではないことは明らかだつた。

ちらりと周囲を見回すと男の他に銀髪の青年と赤髪の少女が遠目
からこちらを見守つている。

「おい、お前は何者だ。何しに地下街へ来た？」

言つてゐる意味がわからなかつた。

私に何者だと聞いてきた彼は私を知らないのだろう。

けど、何をしに地下街へ来たのかという質問はどういう意味か。

「……地下街？」

「そうだ。倒れていたのをこの俺様が見つけてここへ連れてきた。お

前のような身なりの純粹な東洋人はすぐ殺されるからな」

私は男が何を言つているのか訳が分からなかつた。

倒れていったことはわかるけど地下街つて何？

殺されるつてどういうこと??

「ここは、日本ではないの？」

「二ホン……なんだそれは……」

男の言葉に私は言葉を失つた。

え？ なんで？ 日本を知らないの？ 日本語を喋つてゐるのに??

「二ホンというのは君のいたところかい？」

銀髪の垂れ目の青年が聞いてきた。優しそうな顔をしているがそ
の外見に騙されてはならない。質問のタイミングがドンピシヤだ。
私をよく観察している。

「ええ、まあ……」

言葉を何とか絞りながら慎重に答える。

この人たちは何なのか。よく見れば銀髪の青年も赤髪の少女も目の前の男と同じような格好をしている。

「フン……知らず知らずのうちに連れ去られたクチか」

「連れ去られたつて…、そんな…」あり得ない。私が誰かに連れ去られるとしたら家に帰されるだけだ。

ここは家じやない。

病院でもない。

「信じられないのも無理はないがな…。まあいい。元の場所に帰してやらんでもないが…」

「やめて！あの家には絶対に帰りたくない！」

ベッドから立ち上がりつて大声を張り上げると男はニヤリと笑う。「…そうか。それならうちで面倒を見てやつてもいいが…、タダじゃねえ…」

男は私を金持ちの家の間違だと思つてゐる。事実そうだ。お金で解決できるならそれが一番手つ取り早く安心できる。

「お金が必要なのね」と答えた。

「そうじやない。お前の身体で払つてもらう」

「…………つ…!!」

ここは危険だ。すぐに逃げなければ。

思うと同時に私はすぐにドアを開けて外に出た。

「おい待て！」

後ろで声がしたが足を止める気は全くない。ここは危険だ。捕まつたら何をされるかわからない。

角を曲がつて出た通りを無我夢中で駆け出した。

待て！と呼び止められたが私は「身体で支払え」と言われて大人しく待てるような人間じやない。

後ろから数人の人間が追いかけている。

さつきの三百眼の男の仲間なのかそれとも別なのかわからぬけれど、「売り飛ばしてやる」という物騒な声が聞こえてくる。

やはりここも危ない。どこか身を隠せる所を探さなければ……太陽の光が届かない薄暗い路地を走りながら手近の角を曲がつてすぐに左の角を曲がつてまつすぐ駆け抜ける。

私は走りながら思つた。

これは夢なのだろうか。

それともあり得ない現実なのだろうか。

人ひとり分が通れるほどの路地を道なりに抜けると行き止まりだつた。

「……そんな……！」

きよろきよろと辺りを見回して隠れられそうなところを探していふと、突然口を塞がれた。

「……っ!?」

ギシリと身体も固定される。

何が起こったのか、逃れようとしてもビクともしない。

「俺様から逃げるとは良い度胸だ……」

すぐ耳元で低い声がした。先程の三百眼の男の声だつた。

「一、一！」

「大人しくしていろ」

男の息が吹きかかる。

全身に鳥肌が立つた。

そのとき、

誰かの走つてくる足音がした。

おい、いたか？

いいや、そつちは？

すぐそこで誰か男たちの声がする。

東洋人の女だつたよな。あんな上玉滅多に見ない。まだこの辺にいるはずだ！見つけたらまずは俺たちの相手をしてもらうか。東洋人なんて使い道なんていくらでもあるからなあ？

「…………」

全身の血の気が引いていく。私を狙っているのは今ここで私を捕らえている男だけじゃない。

「おい、あつちだ！あつちに逃げてつたぞ！」

誰かの声で近くにいた男たちの声と足音が遠ざかっていく。
しん、とあたりが静まり返った。

「おい、女！、これ以上俺様を怒らせるな。大声を立てたら今ここでお前を殺す……」

男がぐつと私の身体を絞めた。

「…………」

「わかつたか？」

男の言い分なんてわかりたくもないが取りあえずここは大人しくしたがつておいた方がよい。

そう考えて首を縦に振ると男は私を解放した。

バサリ

何かが私を包み込んだ。

大きなボロ布だった。

「…………」

「それでも被つておけ。お前は目立ちすぎるからな」

そう言つて男は私の手首をしつかりと握ると仲間を呼んだ。

「ファーラン、目をつけられたのはどこだ？」

「東のレイモンドのところがほとんどだが、あとは取るに足らない奴らだ」

「…………」

三百眼の男は私の腕を逃げられないようにがつちりと掴むと

「逃げようとしたらどうなるかわかつてんだろうな…………？」と脅してきたが、私はその眼をまっすぐに睨み返す。

「.....」

「チツ...」

男は舌打ちをすると目を逸らして歩き出した。